NEWSLETTER

環境史研究の課題ー中近世と前近代のはざまからー

香川大学　村山　聡

社会経済史学会の理事就任にあたり、社会経済史学会中国四国部会の事務局より、巻頭言の執筆を依頼された。現在、東アジア環境史協会 (Association for East Asian Environmental History) の学会長をしていることもあり、改めて、自らの比較経済史・環境史研究を振り返ることにした。以下は、その原稿であるが、若干、加筆修正をしている。

ドイツ中近世史を専門としながら、日本近世の歴史研究に一歩足を踏み込んで、すでに20年が経過する。ドイツ・ギーセン大学に留学したのは1983年夏からであり、主専攻のドイツ中近世史のほか、社会経済史と社会学を副専攻として、リゴローズムという口頭試問を受けて、最終的に博士号を取得したのは1990年であった。各専攻で最低3課題程度を与えられ、指導教員等と口頭試問を行うのがリゴローズムである。現在は、博士論文に関する試問のみが行われることも多いが、リゴローズムの制度では、個々の課題で卒論あるいは修論程度の知識はカバーしていないと十分な成績を収め、学位を取得することはできない。Dr. phil.という称号はその意味で「哲学博士」なのである。複合的な専門を修得していることの証となる。

筆者は、慶應義塾大学経済学部を卒業後、同大学院の経済学研究科経済史専攻に入り、同博士課程3年からドイツに留学した。日本の社会科学系の大学と大学院で取得した単位も認定されたものの、ギーセン大学の哲学部で博士論文を提出するためには、歴史学系の修了要件単位をすべて整える必要があった。その結果、博士論文の史料研究と論文執筆とともに、ドイツ史に関しては、中世史、近世史、近代史の演習をすべて修得することになった。専攻の学生用ではない初級の演習から博士学位取得者と博士学位申請者のみの最上級の演習まですべて同時に出席していたこともあった。

今から考えるとドイツの大学の専攻の演習というのは、日本の大学の卒業研究にほぼ匹敵する量と質を求められていたように思う。中世史では、ドイツ語特有の帝国・王国に関する細かな議論を原典史料にあたって報告をする必要があったし、近代史では、19世紀の植民地政策や異国からのレポートの詳細を新聞記事やニュースレターを分析する演習でも報

告をした。近世史に関して言えば、ルターの住民救済のための共同献金簿に関する詳細な分析、第二次宗教改革あるいは信条化の時代の多数の演習があった。さすがに近世史が主専門であることもあり、単位とは関係なく、指導教授であるハインツ・シリングの演習にはすべて出席していたので、彼が論文を書きながら演習を行い、著作化しているのを同時に体験することができた。

日本の大学での学部3年から数えて、博士号取得までは、15年近い歳月がかかっている。しかし、その中でも継続的ならびに断続的な滞在を含めて、1983年からの7年間が基本的に私のドイツ時代である。改めて、日本近世をドイツ近世と同時に対象としてからの20年を振り返ると、その研究成果はやはりドイツ時代に比べると心許ない。ただ、ドイツ時代を含めて、ようやく、日本・東アジアとヨーロッパを部分的に比較できるようになったと思う。そこで、経済史および環境史研究者として、「近世」あるいは「中近世」と「前近代」の区別を改めて下記のように述べてみたい。

通常、前近代の人々は自然に適応し、近現代以降の人々は自然を克服することで近代化を成し遂げたと理解される。David Blackbournの好著 The Conquest of Natureは水をとりまく環境改善が現代ドイツを生み出したことを見事に描く。しかし、この方法では「前近代」は文字通り、あくまでも近代以前の社会でしかない。

それに対して、前近代の一つである「近世」は、地球環境における人間と自然の関係性における超長期的な歴史の一つの終着点であったと考える。というのも、その超長期の歴史の最後の1万年の歴史そしてさらにその1万年の中の最後の長くても数百年という「近世」という時代を経験した社会は世界の中のごく一部であった。にもかかわらず、少数の「近世」社会が生み出した資本主義と民主主義そして軍国主義化があらゆる地球上の世界を先導することになったのである。

その理由は、近世ヨーロッパ社会は、人類の脅威であった飢餓と疫病という死に囲まれた世界から脱却する方策を、農地制度の改革と市場システムに基づき確立し、公正と平等の価値という世界標準を生み出し、超長期の人類史の総括をしたからである。世界は、可能な範囲でヨーロッパ近世に習い、世界中で、地球上の多様な生態系の制約を克服し、中央集権的な政府の確立と需要と供給の法則の貫徹という一つの方向を目指すことになった。「近世」ヨーロッパにおいて、「中世」世界の扶養つまり生存維持経済から脱し、「国民国家」が住民増加を推進すると同時に住民の扶養を保障するという政策的な諸相が生み出され、その「前近代」＝「近世」の結果、そこに内包されたジレンマとして、その後の二世紀の間、他者の殺戮を繰り返す戦争の世紀を生み出し、地球から一方的に恩恵を受け続ける人類社会の方向を決定づけたのではないか。

とりわけドイツ語圏のヨーロッパ「近世」は人間社会の長期持続の終着点であったと同時にグローバルな危うさの起点でもあったと考える。日本「近世」とヨーロッパ「近世」は、大きく異なる前近代であったにもかかわらず、その結果、その後の近代の歩みは歩調を合わせることになったのである。

この文章の背景には、2015年10月、香川大学で第３回東アジア環境史学会を開催するにあたって、どのような知のネットワークを構築するべきかという課題と向き合い、多くの若手の研究仲間と構築したネットワークキーワードとの関連が大きい。

「東アジア」というのはどのような地域であろうか。通常、地図を広げて、東アジア、東南アジア、南アジアなどと仕分けをしていくと、国境に基づく、明確な境界線があるかのように見える。本当にそうなのか。

Association for East Asian Environmental History

EAEH 2015

Beyond borders.
Oceans, mountains, and rivers in East Asia.

Time: October 22-25 , 2015
Place: Takamatsu, Kagawa, Japan
Venue: Kagawa University Sun-Port Hall
Contact:
eaeh2015@issjp.com
hsyunliu@gate.sinica.edu.tw
URL: http://www.aeaeh.org

Provisional Program

October 22, Thursday: 13:00–21:30
Opening plenary sessions:
"Circulating Natures. Water, Air, and Foods."
Keynote speech by Dr. Brett L. Walker, Montana State University, Bozeman
Welcome party

October 23, Friday: 8:00–19:00
Teshima-Naoshima ecological tour:
"Art Islands and Waste Islands,"
followed by a roundtable and an open symposium

October 24, Saturday: 9:00–21:30
Parallel sessions
General meeting and a dinner party

October 25, Sunday: 9:00–16:00
Parallel sessions
Network lunch meeting
Roundtable with presentations of distinguished environmental historians including the keynote speakers: "Environmental History in the Future"

第３回東アジア環境史学会のリーフレット

巨大な人口を抱え、今後の世界へ大きな影響力を示すことになる中国やインド、南北問題が今も残る朝鮮半島そして日本列島、しかし、インドはバングラデシュと共に東アジアではなく、タイやベトナム、カンボジアなどと共に南アジアなのだろう。そうであれば、東アジア環境史協会というのは、インドやバングラデシュなどは対象とならない。しかし、国境線に基づく、このような地域区分はどれほど意味があるのだろうか。鳥類や魚類の視点から見ればどのように考えるべきなのだろうか。細菌のレベルから見るとどのように考えられるのだろうか。地球温暖化で議論される大気から見た時はどうであろうか。

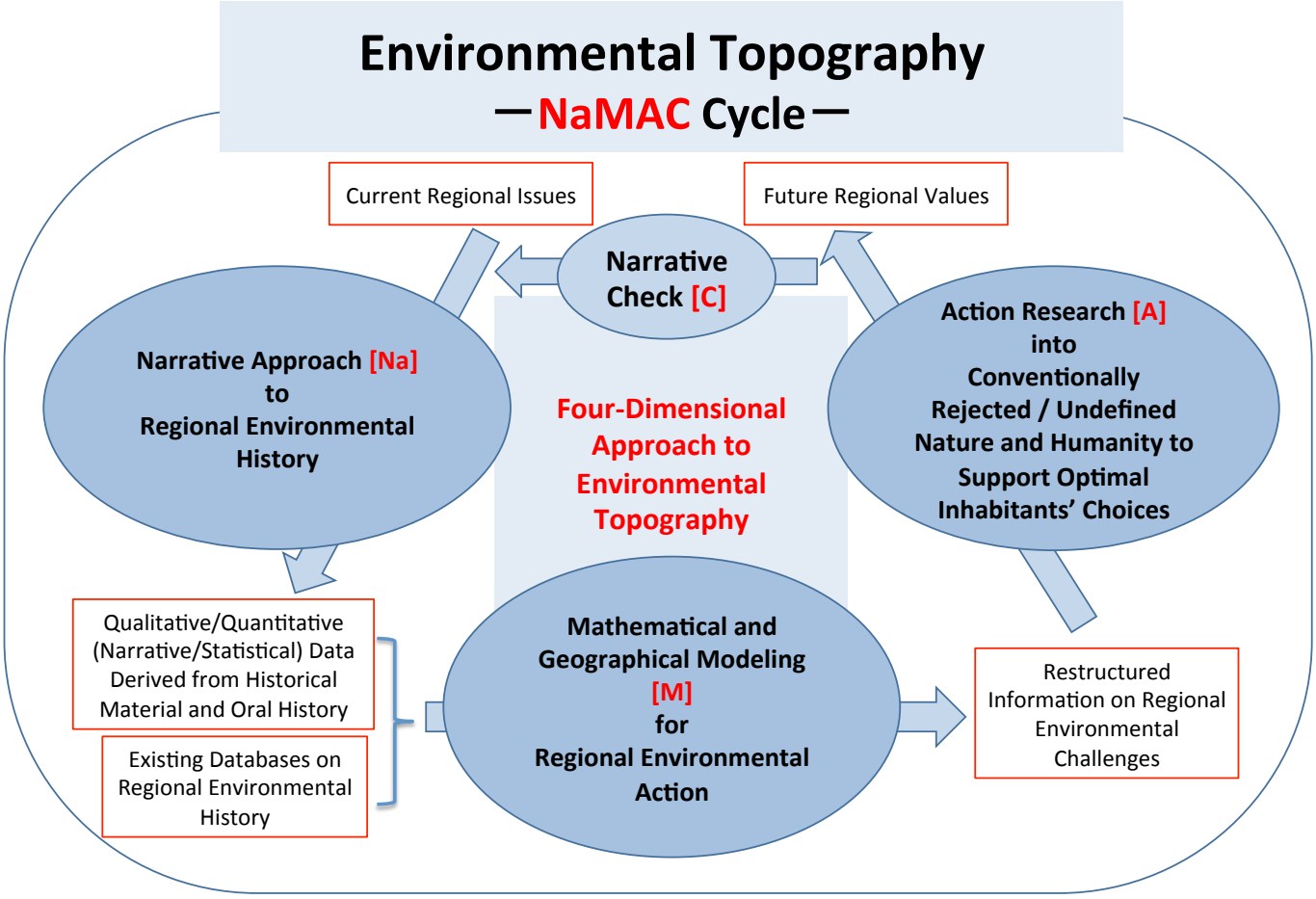
Table: Network Keywords for the *Journal of East Asian Environmental History*

1) Animals i) aquatic animals ii) wildlife iii) domestication iv) zoo and aquarium v) species preservation & extinction	2) Plants i) greening ii) forestry (afforestation, deforestation) iii) wild plants (edible, medicinal, spiritual) iv) crops (agroforestry, agriculture) v) invasive species vi) species preservation & extinction
3) Microorganisms i) biosphere ii) atmosphere iii) microbes iv) infectious diseases & vectors v) pandemic/endemic vi) zoonosis	4) Water i) urban water ii) lakes and river water iii) ground water iv) wetlands v) seas and oceans vi) irrigation
5) Air i) atmosphere ii) clean air iii) air/space pollution iv) weather v) climate change (anthropogenic and natural)	6) Land i) lithosphere/cryosphere ii) soils iii) earth movers iv) cultural/ecological landscapes v) continents and islands
7) Disasters i) natural events ii) extreme weather events iii) anthropogenic environmental disasters iv) historical records v) mitigation vi) resilience and recovery	8) Foods i) food security ii) food and technology iii) animal husbandry/pastoralism iv) land and sea nomadism v) material circulation (land and sea links)
9) Waste i) biological waste ii) chemical and hazardous wastes iii) waste management iv) material circulation v) consumption behavior	10) Humans i) gender/sexuality ii) population iii) ethnicity iv) nature views/religion/ethics v) ecological footprint

東アジアが圧倒的な中華圏の影響化にある地域であることは否定できないであろう。しかし、そのような文化的なレベルあるいは人類史の一コマに過ぎない国民国家の境界線から、地域を限定することは、どのような意味があるのだろうか。現在、地球上のすべての人々は国際的に認められた国家の一員である。「イスラム国」はその範疇ではない。しかし、歴史を振り返ると、人類の歴史の過去３世紀はほとんどこの国境線に関する闘争に明け暮れてきたのである。

環境史研究はこの人類史の一コマである国民国家史観に捕われる必要はない。しかし、人類の平和と安定に不可欠な国民国家から離脱するなど、到底考えられない。とはいえ、自分が渡り鳥であったとすると、この国境線の意味は何かあるだろうかと考える。中国から飛んでくる黄砂やPM2.5などが見ている世界とは何であろうか。人間として、ある意味で曖昧な境界線をもった

「東アジア」になんらかの形で関わる人々の集合体を「東アジア環境史協会」と考えたい。そうでなければ、たとえば、日本の侵略戦争時代の多方面へ拡充の本質を把握することはできない。国境が境界線を有するとしても、その国境は、先に挙げたネットワークキーワードの世界では、多様で多層でありうるのである。



このような視点に立った時、環境史研究は今までとは全く異なる新たな歴史研究と歴史理解の道を開くことになる。

ヒトは、物理的な数理モデルの世界を基盤とて、「お話の世界」を通して、膨大な世界を切り取り、自己理解をしていると考えるが、その「お話の世界」を一つの「科学」として構築してきたのが、人文系あるいは社会科学系の科学であった。人間の「科学」である。しかし、物理的な数理モデルが対象としているのは、ヒトの社会に限られない。問題は、「お話の世界」があまりにも強く人間主義的であり、ヒトと人類社会しか視野においていないことにある。「言語」がすべてであるから仕方がないとしても、現在の人間社会は、クジラの保護に向かい、絶滅危惧種を憂い、遺伝子操作がされた食品を忌避している。複雑な農業や漁業の世界は、「お話の世界」の一つである単純な経済談義で済ますわけにはいかないと考える。ヒトと自然との関係性は、根本から問い直すべき時代になっているのである。